

森永乳業の育児ニュース「エンゼル 110 番レポート第 63 号」発行

今回のテーマ「35 年で変わったこと、変わらなかったこと」

100 人のお母さんに聞きました

森永乳業は、時代とともに変わりつつある母親の理解に役立つことを願い、1993 年 4 月から「エンゼル 110 番レポート」を発行しております。この「エンゼル 110 番レポート」は、育児相談窓口「エンゼル 110 番」への相談内容から、毎回育児に関する傾向についてまとめています。

エンゼル 110 番は、「お話ししましょうお母さん、あなたの赤ちゃんのこと」をキャッチフレーズに 1975 年 5 月に開設し、2010 年 5 月で満 35 年を迎えました。

開設当時の 1970 年代は、明るい未来を象徴するかのような「人類の進歩と調和」をテーマにした大阪万博で幕を開けました。しかし、急激な高度経済成長の影響で、従来の大家族から核家族という新しい家族構成が広がり、育児をめぐる環境が大きく変化した時代でした。そこで、森永乳業が「子育て奮闘中のお母さんたちのために何かお役に立てる事はないか」と考え、育児用ミルクメーカー初の育児相談窓口として開設しました。

子育ては楽しいものですが、いつの時代も心配や悩みはつきものです。そんなお母さんたちの相談窓口として、35 年間で受けした相談件数は約 85 万件（2010 年 11 月現在）にのぼります。

相談者は主に母親ですが、父親や祖父母などさまざまな立場の方にもご利用いただいています。最近では「私の母が私を産んだときに利用したと、教えてくれました」という母娘 2 代にわたるご利用もあります。

今回はエンゼル 110 番の 35 年間で振り返り、「変わったこと、変わらなかったこと」に焦点を当てました。

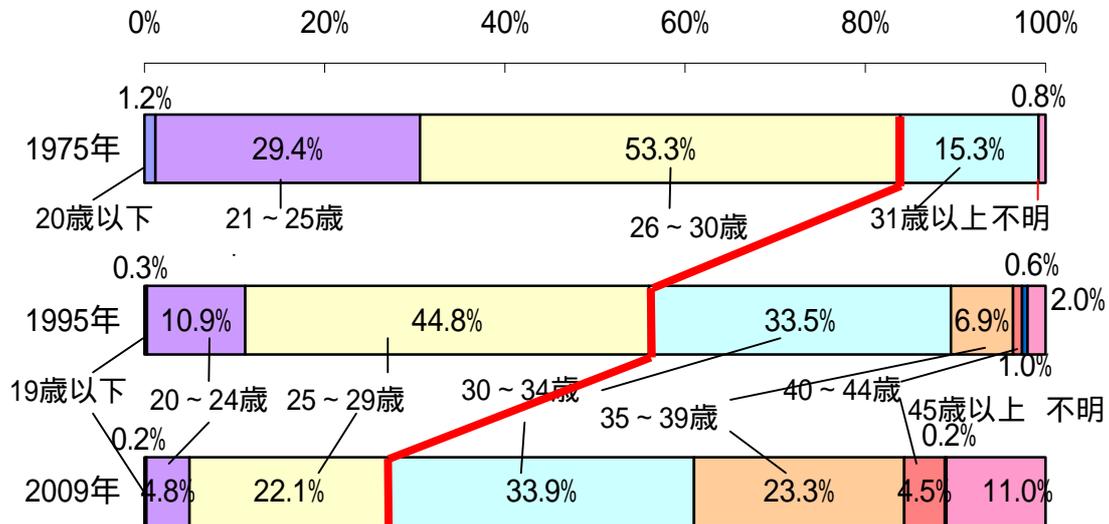
【主なアンケート結果】

35 年間で変わったこと ... 出産年齢・相談内容

35 年間で変わらなかったこと ... 相談対象の子どもの月齢

出産年齢の高齢化

図1 相談者(母親)の年齢推移



人口動態統計をみると、女性一人が生涯に産む子どもの数（合計特殊出生率）は1975年に1.91人であったものが、2009年には1.37人に減少し、初産年齢は25.7歳から29.7歳に上昇しました。女性の晩婚化、晩産化を反映して、エンゼル110番を利用する母親の年代も変化してきました。（図1参照）

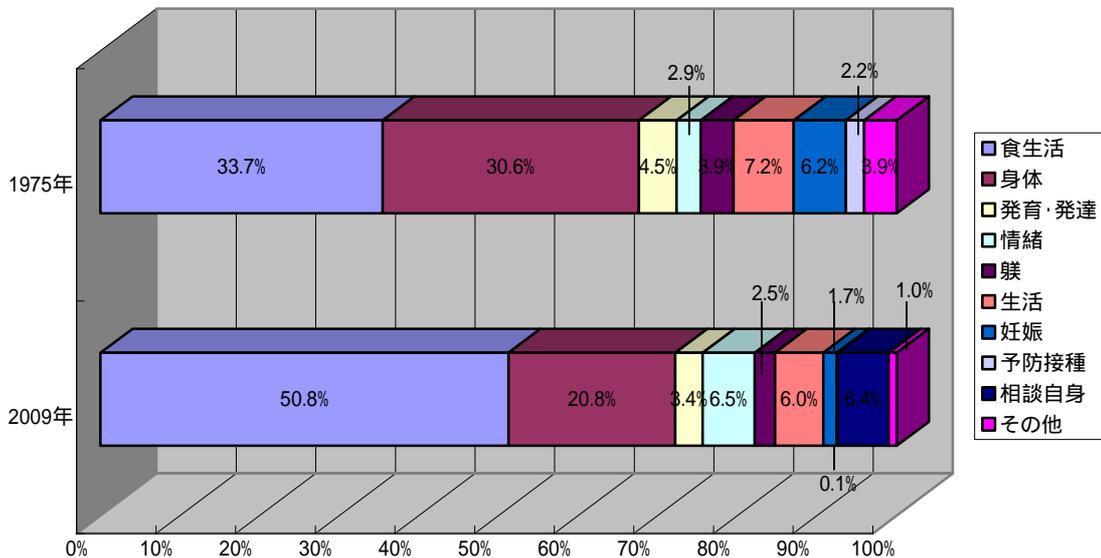
開設当初（1975年）は、利用者の8割以上が30歳以下だったのに対し、2002年を境に30歳以上の相談が半数を越え、2009年には30歳以上が7割を占めるようになりました。今では40歳代で初産という母親も珍しくありません。

母親の年齢は上がってはいますが、育児に関してはまだ知識が少し不足していると感じられる内容があります。「赤ちゃんの便秘には、糖水がよいと聞きました。水分と糖分のどちらが大事ですか？糖分が大事なら、乳首の先に砂糖をつけて母乳を飲ませてよいですか？」「紫外線がよくないと聞いたので、昼間は遮光カーテンを閉めていました。訪ねてきた叔母に『からだに悪いよ』と言われました」などの相談があります。

1975年は、核家族化がすすんできたとはいえ、大家族の中で育ったので現在の母親に比べ生活感は持っていたと思われます。しかし、現在の母親世代は生まれた時から核家族で兄弟も少なく、赤ちゃんと接する機会は、開設時の母親世代に比べてさらに少なくなっています。以上より、赤ちゃんを特別なものと考え、意識しすぎてしまうのかもしれない。

食生活の相談内容が半数を占める

図3 相談内容分類



開設当初から、授乳や、離乳食のことなど「食生活」は相談内容の中で最も多い項目となっています。(図3参照) エンゼル110番がスタートした初日、一番に入った電話も「体重の増加が一日24gですが、母乳不足でしょうか」という内容でした。また、その年の夏になると「暑くなり、『飲まない、食べない』の相談が集中」しているのも、今も変わらない傾向です。

開設当時は「食生活」の相談が占める割合は1/3でしたが、1994年頃から徐々に増え、2006年には半数を超えました。これは、保健センターや子育て広場など相談する窓口が広がり、お母さんたちが知りたい内容によって相談先を使い分けていることが主因と思われます。

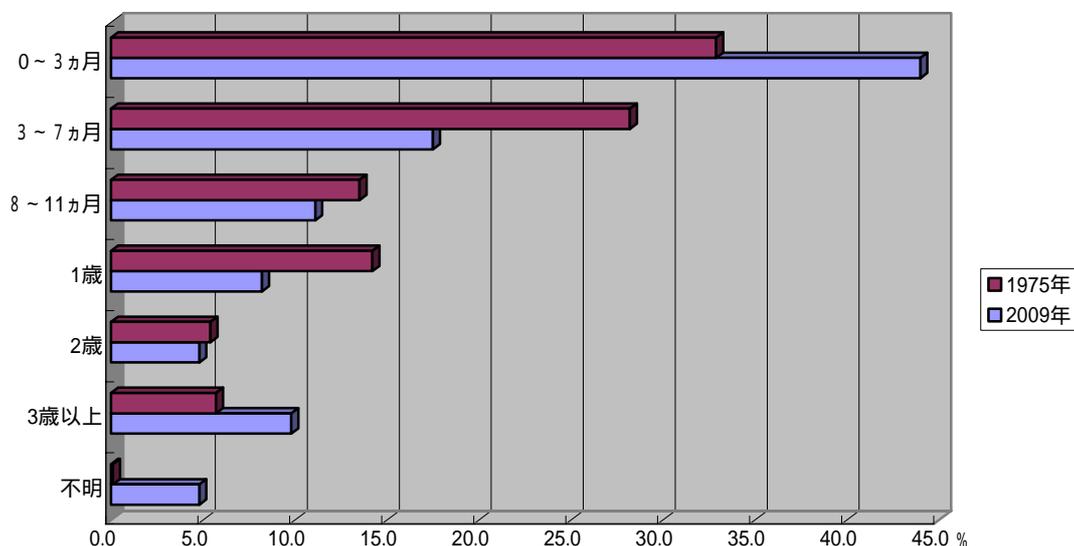
(エンゼル110番レポートVol.43「信頼できる育児の情報源とママたちの満足度」より)

また、「乳業メーカーだから食生活」というイメージで、この分野に関する信頼が割合に反映しているものと推定されます。

35年変わらなかったこと

子どもが低月齢の時期に相談が集中

図2 子どもの月齢(年齢)



思うようにいかない授乳、しゃっくりが続くだけでも心配になる体のことなど、生後3ヵ月までは不安と気がかりの連続です。そのため、0～3ヵ月までの期間に相談が集中する傾向は35年間変わっていません。4ヵ月以降になると、赤ちゃんの生活リズムも安定し、お母さんの気持ちが落ち着き、徐々に相談の件数は少なくなります。(図2参照)

厚生労働省の調査(「平成17年度乳幼児栄養調査」)では、出産直後の授乳の不安がもっとも強くなっています。

特に2009年は0～3ヵ月までの比率が高くなりました。これは、2008年以降、産婦人科にて配布している森永乳業「わたしの育児日記」にエンゼル110番の電話番号を掲載しており、出産直後から目にする機会が増えているためかと思われます。

また、開設当時に比べ3歳以上の比率が増えています。3歳以上の相談では、早期教育への関心や、集団生活への不安などが多い時期もありました。その後、幼稚園でのママ友の付き合いに代表される、お母さん自身の人間関係の相談が増えています。

変わる「育児を取り巻く状況」、変わらない「親の想い」

エンゼル 110 番開設時の記録を見ると「生後 6 ヶ月、7 ヶ月、9 ヶ月などで、牛乳に切り替えたいと言う相談が多い。牛乳は完全食品だから、牛乳に替えなければならぬという考え方が浸透している」という記載があります。現在の「牛乳の飲用は 1 歳を過ぎてから」という考え方に比べると、早い時期の切り替えに驚かされます。

このように過去の記録を振り返ると、育児を取り巻く状況の変化によって相談内容は大きく変わっています。

離乳食の開始や完了時期についても変化しました。1958 年頃の離乳開始の平均は 7.2 ヶ月でしたが、1958 年に文部省が離乳指導の指針として出した「離乳基本案」では、欧米の赤ちゃんに負けないようにと、人工乳を与えることを促進し、離乳の開始と完了の早期化が目指されました。乳児死亡率が他の先進国より高かったこともあり、当時の実態より 2 ヶ月早めの「5 ヶ月」になりました。また、1964 年に初版がでた「スポック博士の育児書」に代表される欧米の考え方も、離乳開始の早期化を後押ししていると思われます。

1978 年 4 月に 3 周年を記念して発行した小冊子を見てみると、離乳食の開始時期で最も多かったのが生後 4 ヶ月で 40.5%、次いで 3 ヶ月が 24.3%でした。

その後、1980 年に「離乳の基本」、1995 年 12 月に改定「離乳の基本」がだされ、離乳指導の指針として使われました。また、母乳栄養の意義を再認識して、母乳育児を推進しようという動きができました。

さらに、従来取り組まれていた母乳育児の推進を図る観点から、2007 年 3 月には「授乳・離乳の支援ガイド」が策定されました。この支援ガイドでは、離乳開始前に乳汁以外のものを与える必要はないとしています。それに伴い、エンゼル 110 番への果汁やスープの相談も半減しました。また「病院では、離乳食の開始前は母乳とミルク以外のものは与えなくてよいと聞きましたが、(私の)母に沐浴後は湯ざましを与えなさいと言われる」といった世代間でのずれがでています。

このようにエンゼル 110 番の 35 年は、社会が推進する内容によって相談の内容は変化しました。しかし、赤ちゃんの発育や発達が変わったわけではありません。そして、わが子が健やかに育つことを願う親の気持ちも 35 年間変わっていないといえるでしょう。

「イクメン」登場で子育ては変わるか？

エンゼル 110 番の相談者は主に母親で、父親はわずか 1%前後ですが、この 35 年間で父親の育児参加もだいぶ変化してきているようです。ここ数年、育児に積極的に参加する男性を「イクメン」と呼び、世間の話題にのぼることが多くなっています。2010 年 11 月、森永乳業社内で男性社員向けに「エンゼル 110 番のパパ講座」を実施しました。

開設時の記録に「2 歳で食事を全然食べないという相談。内容を聞くと、缶ジュースを毎日 6~7 本飲ませているという。父親が『飲みただけ好きなものを飲ませろ』という意見であり、自分の食生活に大変な自信を持っている。まず夫婦で育児について語り合う時間を持つよう話す。」と子どもと大人と一緒に考えている父親の話がありました。まだ、育児は母親まかせの色合いが強かったようです。

そして、1985 年に 10 周年を記念して発行したレポートには「10 年前に比べ、お父さんからの相談がとても増えました。土曜日に、中には会社の昼休みに相談を頂きます。」とあり、「妻が勤めているので、ぼくが離乳食を作って食べさせているが、ミルクは 900ml くらい飲むのに全然食べてくれない。」と赤ちゃんとよく接しているパパの声が載っています。

昨年、エンゼル 110 番で実施したアンケートでは、「パパは イクメン だと思いますか」の問いに対して、妻から とてもイクメン と評価された夫は全体の約 3 割弱で、「努力している」「少しは頑張ってる」という理由で イクメン と認められた夫を合わせると、約 7 割が イクメン という結果でした。

(エンゼル 110 番レポート vol.62 「パパはイクメンですか？」)

街中の様子を見ると、父親のみで赤ちゃんと一緒に外出している姿をよく見かけます。父親向けのベビーグッズのお店や、抱っこひも、育児バックといった商品もでています。エンゼル 110 番には「夜泣きが 2 時間おきで、妻が困っている。土日は手伝っているが、平日は残業があり手伝えない。」「妻が育児ノイローゼ気味。知人友人が近くにいない。妻の悩みを聞いているが、週に 1 回は喧嘩になってしまう。」など、自分なりに育児参加しているのにうまくいかないという父親からの相談が寄せられました。

日本の男性の育児参加率は先進国の中でも最低水準といわれています。有給休暇も容易にとれない仕事環境では、やむをえない状況なのかもしれません。そして、2009 年に共働き世帯が専業主婦世帯を大きく上回りました。高度成長期の「夫は正社員で年収 600 万円。妻は専業主婦、子どもは 2 人の核家族」という標準モデルはなくなりつつあります。

エンゼル 110 番でも育児休暇中の母親から「復職のために断乳したい」という相談が増えています。これからは、男女ともに働きながら子育てをする時代になってくるのでしょうか。そして イクメン が当たり前になったとき、子育てはもっと楽しいものになると思います。